

<研究ノート>

地域創生に資する「現代アート」の力

—調査事例からの一考察—

八 田 典 子

はじめに

1. 調査事例の実際

(1) 概要

(2) NAOSHIMA STANDARD²

(3) 神戸ビエンナーレ（2007及び2009）

(4) 越後妻有2008冬

(5) ドクメンタ12

2. 新潟県における新たな試み—「水と土の芸術祭2009」—

3. 「ミュンスター彫刻プロジェクト」の特質とその効果

(1) プロジェクト創設の経緯と第4回展の内容

(2) その特質と効果

むすび

はじめに

近年、国内外の各地で、現代アートを中心とした国際展の開催やアートプロジェクトの実施が相次いでいる。また、コレクションの内容を現代アートに特化した美術館の開館や、現代アートによるユニークな企画展やワークショップ等に力を入れる美術館も増加傾向にある。21世紀も10年近くが過ぎ、難解なイメージが先行して敬遠されがちであった現代アートも、社会の中で徐々に市民権を獲得してきた感がある。

このような昨今の動きの中でも顕著であるのが、現代アートと地域の関わりを重視した多彩な試みである。本稿は、過去3年間（2007年度～2009年度）に筆者が実地調査を行なった事例を中心に、地域における現代アートによる取り組みの現状を把握し、地域創生に資する現代アートの力について一考を傾けるものである。

1. 調査事例の実際

(1) 概要

この3年間（2007年度～2009年度）は、先述した状況の中でも特に、本稿の問題関心に照らして大変実りの多い期間であった。

2007年度は、まず海外で、美術界における「惑星直列現象」と呼ばれる、ヨーロッパ3

大国際美術展の同時開催が起こった。すなわち、2年に1度の「ヴェネツィア・ビエンナーレ」、5年に1度の「ドクメンタ」、10年に1度の「ミュンスター彫刻プロジェクト」がそろって開催されるという特別な1年であった。一方、国内においても、香川県直島では「NAOSHIMA STANDARD²」（2006年度からの継続企画）、神戸では初めてのビエンナーレ、また、2000年以来3年に1度、夏季に芸術祭を開催してきた新潟県の越後妻有地域で、雪深いという地域の特質を見据えた初めての企画として、冬季におけるアートプロジェクト「越後妻有2008冬」が実施されるなど、継続的な取り組みとともに新たな動きが見られた。

次いで、2008年度には、トリエンナーレとしては初回となる「プラハ・トリエンナーレ」、国内では、3回目を迎えた「横浜トリエンナーレ」や、初めての試みであった「金沢アートプラットフォーム」等が開催された。

2009年度には、恒例の「ヴェネツィア・ビエンナーレ」「リヨン・ビエンナーレ」、4回目を迎えた「大地の芸術祭・越後妻有アートトリエンナーレ」「福岡アジア美術トリエンナーレ」、2回目を迎えた「神戸ビエンナーレ」等に加え、新たな取り組みとして、別府市で「別府現代芸術フェスティバル・混浴温泉世界」、新潟市では「水と土の芸術祭」が実施され、それぞれ大きな注目を浴びた。

これらの中から本稿では、特に本稿のテーマに関わる興味深い取り組みとして、「NAOSHIMA STANDARD²」「神戸ビエンナーレ（2007及び2009）」「越後妻有2008冬」「ドクメンタ12」「水と土の芸術祭2009」「ミュンスター彫刻プロジェクト07」を具体的事例として考察する。まず、本章では、「NAOSHIMA STANDARD²」以下の4事例を取り上げる。次いで、「水と土の芸術祭2009」以下の2事例については、章を改めて検証することとする。

(2) NAOSHIMA STANDARD²

「NAOSHIMA STANDARD²」は、2006年10月7日－12月24日及び2007年2月24日－4月15日を会期として、香川県直島及び直島諸島を会場として実施されたものである。地域の自然や歴史、文化とアートとの関わりを重視して1980年代後半から展開されてきたアートプロジェクト「ベネッセアートサイト直島」¹⁾の一環として催されたもので、2001年の「THE STANDARD」に続く企画であった。今回は、11名1組の作家が参加し、「アートの日常化」及び「風景をつくる」ことをテーマに、港や海辺の岩壁、古民家、神社など、島内の多様なサイトにおいて地域に根差した作品の制作、設置が行なわれた。

まず、来訪者の目を引くのは、直島の玄関口である宮浦港に鎮座する、草間弥生の《赤かぼちゃ》である。これは、直径696cm、高さ395cmという巨大な作品であり、全体に赤く塗られた表面には、黒い大小の水玉もペイントされている。内部は空洞であり、何箇所か、円窓のような開口部が開けられているので、中を覗き込んだり、逆に、かぼちゃの中に入って外の景色を見ることもできる。のどかな瀬戸内の海景には一見そぐわない印象の、強烈な個性をもった作品であるが、それだけに、到着早々この巨大かぼちゃを目にする人々は、アートサイト直島にやって来たことを強く実感することになる。

《赤かぼちゃ》は、新たな風景を創出し、現在の直島の特性を印象づける効果を発する作品といえるが、今回のプロジェクト全体の傾向からすると、島の歴史や伝統を喚起する試みの方が多かった。

伝統的な家並みが続く本村地区には、全12作品のうち7作品が設置された。家々に囲まれた空き地のほか、明治時代に製塩業で栄えた「石橋家」や、かつては人々が集い碁を打った場所であったという「碁会所」、歯科医院兼住居であったという「はいしゃ」、直島全体を守護する「直島八幡神社」などが、そのサイトとして選ばれた。「石橋家」では、修復・再建された家屋全体を会場として、千住博の滝をモチーフとした色鮮やかな連作が並べられ、「碁会所」では、江戸時代の蘭学者の書齋をイメージした家屋とその座敷に点々と置かれたリアルな椿の花（木彫作品）の双方が、須田悦弘の作品として展覧された。多くの島民の信仰を集める「直島八幡神社」では、上原三千代の《いつかは眠り猫》等の猫をモチーフとしたユーモラスな作品が鑑賞者の笑顔を誘い、また、本村地区の数十メートル沖合に位置する向島には、住民票も移したという川俣正が住まいとスタジオを設け、「向島プロジェクト」を展開中であった。

本村地区以外でも、かつての卓球場や理容院等を活用したプロジェクトが行なわれており、アートによる新しい空間の提示が、島の歴史を掘り起こし、人々の意識と島の歩みを取り結ぶ役割を果たしていた。また、積浦地区の休耕田では実際に稲作を行う「コメづくりプロジェクト」も実施された。

総合プロデューサーである福武総一郎は、アートを美術館という枠組みの中だけでなく、生活の中に置いて、「アートは、地域を元気にする」ことを多くの人々に実感してほしいと語っている²⁾。

2010年には直島をはじめとする瀬戸内海の島々を舞台とした「瀬戸内国際芸術祭」の開催も予定されており、この地域におけるアートプロジェクトの今後いっそうの展開が注目されている。

(3) 神戸ビエンナーレ (2007及び2009)

「神戸ビエンナーレ2007」は、2007年10月6日-11月25日を会期とし、港町・神戸のシンボリックなサイトであるメリケンパークを主会場として開催された。神戸市では、阪神・淡路大震災後10年を機に、まちづくりの基本理念として「神戸文化創生都市宣言」がなされた。この「宣言」は、古くから多様な文化が流入・交流する地であった神戸の歴史と、震災後の混乱の中で芸術文化が人々の心を癒し復興への活力を与えてくれたという経緯を踏まえて行なわれたものである。「神戸ビエンナーレ」は、この宣言のもと、「神戸の芸術文化の更なる振興を図るとともに、まちのにぎわい、活性化につなげる試み」として創設されたものであり、「神戸らしい都市イメージの発信」「若手アーティスト等の育成」「多種多様な芸術文化の交流・融合」「芸術文化を活かした都市づくり」をその理念とする³⁾。

2007年に開催された第1回展では、「出会い—人・町・芸術—」をテーマとして掲げ、現代アートに限らず、生け花や洋菓子などの伝統文化や生活文化のジャンルも含めた多彩な企画が実施された。

そのうち、メイン事業として実施された「アート イン コンテナ」コンペティションは、港町・神戸の発展にゆかりの深い輸送用のコンテナを展示空間とした、ユニークな試みであった。これは、アーティストの創意によって、奥行12メートル、幅2.4メートル、高さ2.5メートルのコンテナの内部を作品化するもので、356点の応募作から45点が選ばれ展示された。来場者は、会場いっばいに設置されたコンテナを次々と訪ねては、コンテナごとに表現された独自の作品世界を目にした。コンテナという同一の、閉鎖的なスペースを使

うという制約の大きな表現であるだけに、その多様性が多くの来場者の目を引いていた。最優秀賞である「神戸ビエンナーレ大賞」には、スーパーボールがコンテナ内を勢いよく飛び交う、白井英之の作品《40%》が選ばれた。「アート イン コンテナ」のほかにも、「大道芸」、「現代陶芸」、「ユニバーサルデザインポスター」「浮遊するオブジェ」等のコンペティションや、「こども絵画コンクール」「エイブル・アート『仲間たち』展」等の企画がなされ、計約5千点の応募があった。また、来場者は51日間の期間中、14万4千人を数えた。

2009年には、10月3日-11月23日の会期で、「わ wa」をテーマとする第2回展が開催された。「わ wa」とは、「平和」「調和」「和み」「環」「輪」などを意味し、総合ディレクターの吉田泰巳によると、次のようなメッセージが込められているという。

「いまや地球上の社会のすべてが、環境とともにある『美』意識を見直す時を迎えています。私たちの文化の根底に受け継がれてきた古くて新しい『わ』の姿勢を、21世紀の地球環境および文化創生のキーコンセプトとして国内外に提示したいと思えます」⁴⁾

会場は、「メリケンパーク」「兵庫県立美術館」「神戸港」「三宮・元町商店街ほか」の4カ所であり、国内外の作家のみならず多くの市民が参加しての多様な取り組みが展開された。会場に関して今回特にユニークであったのは、初めての試みとして設置された「神戸港会場」である。「海上アート展」と銘打って、船に乗って、メリケンパークと県立美術館を結ぶ海上ルートに設置された作品を鑑賞するという趣向であり、船中では、前衛的なパフォーマンスも披露され、芸術祭の雰囲気盛り上げた。作品鑑賞とともに、海から見える神戸の景観や海の息吹も楽しんでもらおうとするものであり、神戸らしさをいかに出すか、という工夫の感じられる取り組みであった。

メイン事業は前回に引き続いて開催された「アート イン コンテナ」国際展であり、今回は398点の応募作から、30作品が選ばれて展示された。「神戸ビエンナーレ大賞」には、「コンテナの内部に、限りなく広がる海を表出させ、彼方へ続く空間」を生み出した、戸島麻貴の《beyond the sea》が選ばれた⁵⁾。「アート イン コンテナ」以外にも、陶芸や写真、大道芸等の6つのコンペティションが行われている。その中で、今回、新たな試みであったのが、「グリーンアート展」「市民園芸アート展」という、植物を素材とする表現を対象とした取り組みであった。「グリーンアート展」の説明に、「日々少しずつ形・色を変えていく植物が、新しいアートの形を創造します」⁶⁾とあるように、ガーデニングとアートを融合させたユニークな造形表現の可能性を感じさせるものであった。

コンペティション以外にも、いけばな未来展、書の世界展、「人と人とアートと人と三宮・元町アートプロジェクト」等の数々の展示やイベントが行なわれた。

このビエンナーレの特徴として目を引くのは、コンペティションをはじめ参加型の企画が多いことと、多様なジャンルを取り込んでいることである。このことは、できるだけ多数の人々の関与を誘ってまちの魅力や活力を向上させていくという効果を生む。現代アートの表現活動の最先端に触れる機会となるとともに、特に、市民にとって、自分自身や身近な人々の作品発表・鑑賞の場としても親しめる機会となることで、大きな目標とされているビエンナーレであるといえる。来場者は52日間の会期を終え、約15万人であった。

(4) 越後妻有2008冬

「越後妻有2008冬」は、2000年以来、「大地の芸術祭・越後妻有アートトリエンナーレ」が開催されている新潟県の越後妻有地域において、同芸術祭の実行委員会によって実施された、初めての冬のプロジェクトである。2008年1月から3月の期間に、地元住民と作家、サポーターの協働により、現代アートとともに小正月や雪まつり等の地元の祭事を核とした多種多様なワークショップやイベント等が行なわれた。具体例としては、新潟県で活動する11名の作家たちによる「越後妻有 雪アートプロジェクト」、2006年夏の芸術祭の「空家プロジェクト」で空家を活用して作られた「名ヶ山写真館」でのワークショップ、やはり同時期の「空家プロジェクト」で焼き物によるインスタレーション等で作品化された「うぶすなの家」でのひな祭りイベント、アート体験と地元の行事・食文化体験を兼ねたいくつかのツアーの実施が挙げられる。

筆者は2月中旬、「越後妻有 雪アートプロジェクト」が実施される時期に当地を訪ねた。この「雪アートプロジェクト」は、十日町市中里エリア（旧中里村）の温泉保養施設「ミオンなかさと」周辺の雪原を舞台に行なわれた。一面の積雪の上にさらに間断なく雪が降り注ぐ白一色の景色の中、作家と地元の子供たちが思い思いに作ったオブジェに雪を降り積もらせた作品「雪ぼうし」、かつて雪下ろしに使われていた古いはしご80本を林立させた「はしごの森アート」、かんじきで踏み固め、融雪剤で着色して描かれた巨大な雪上絵などが披露され、雪原に投身してスタンプングするボディアート体験、地元で木材の運搬に使われていた大ぞりに乗る体験、作家がデザインしたかまくらの中での抹茶による接待などが行なわれた。大ぞりは、作家と地元の人々が協力して復活させたものという。他にも、地元オリジナルの温かい汁物の無料配付や商品の販売等も行なわれており、「雪」と向き合った珍しいアートプロジェクトとしての面白みとともに、地元の人々が参加し楽しんでいく様子が印象に残る催しであった。

「雪アートプロジェクト」の他、東京総合写真専門学校によるワークショップが行なわれていた「名ヶ山写真館」や、旧名ヶ山小学校周辺でのかまくらを使ったアート作品とどんど焼き、旧松代町の「まつだい『農舞台』農舞台ギャラリー」で開催されていた「8人の妻有焼展」、この時期に限定的に公開されていた、2006年夏の芸術祭の作品であるクリスチャン・ボルタンスキー＋ジャン・カルマンの《最後の教室》と、日本大学芸術学部彫刻コース有志による《脱皮する家》にも多くの人々が訪れていた。「妻有焼」は、2006年の芸術祭での「土」をキーワードとしたプロジェクトによって興されたものであり、「妻有焼展」では、その後の継続的な取り組みの成果が発表されていた。

越後妻有地域の特筆すべき地域特性である「大雪」に、初めて正面から向き合ったこの冬のプロジェクトは、この地におけるアートプロジェクトの継続性をもたらす様々な効果を確認させてくれるものであった。背丈をはるかに超える雪の壁に挟まれた道をたどってのアート体験を経て、何より印象深く思われたのは、アートと地元の行事が混在したイベント会場や、《脱皮する家》の受付等、行く先々で出会った地元の人々の笑顔であり言葉であった。農閑期ということで、夏季よりも比較的ゆったりと過ごせる時期であるとの話も伺ったが、アートを結び手とする様々な試みが地元で自然に受け入れられている状況が窺え、アートと地域との関係のいっそうの深化が感じられた。

(5) ドクメンタ12

「ドクメンタ」は、1955年の創設以来、当初は4年毎、近年では5年毎に、ドイツ中央部のヘッセン州に位置するカッセル市で開催されてきた国際美術展である。「ドクメンタ12」はその第12回展であり、2007年6月16日－9月23日を会期として開かれた。

カッセルは、フルダ川沿いに広がる人口19万4千人の地方都市である。グリム兄弟が長らく暮らした町でもあり、「メルヘン街道」の主要都市としても知られているが、第2次世界大戦では大きな戦禍を被ったという。「ドクメンタ」は、戦争の記憶も未だ褪せぬ時期に、ナチス政権下で抑圧された前衛芸術の復権を図り、新生ドイツにおける芸術文化活動の自由さ、先進性をアピールすることを大きな目標として始められた。カッセルは旧東ドイツに隣接する位置にあるため、特に冷戦時代においては、「ドクメンタ」が持つ政治的な意味合いは大きなものであったという。その後の時代の変化の中で、当初の政治色が薄れていくとともに、現代美術の最先端を示す、「ヴェネツィア・ビエンナーレ」と並び称される世界有数の国際美術展としての地位を確立し、今日に至る。

「ヴェネツィア・ビエンナーレ」と異なる「ドクメンタ」の特徴は、一人の総合ディレクター（芸術監督）が、テーマの設定や作家の人選等、すべてを取り仕切る点にある。「ドクメンタ12」では、ロジャー・M・ブーゲルが、20年ぶりのドイツ人ディレクターとしてこの任に当たった（妻のルース・ノアックもキュレーターとして参画）。テーマとして、「近代性は我々の過去か?」「むき出しの生とは何か?」「(教育において)何がなされるべきか?」という3つの問いかけが示され、43カ国109人／組の作家の参加により、500点以上もの作品が展覧された。チケット購入による入場者は75万4千人を数え、それ以外に、美術関係者やジャーナリストたち約2万人も来場したという。カッセルにとっての「ドクメンタ」は、「ドクメンタあつてのカッセル」といわれるほどの大きな存在であり、今回も5年に1度の現代アートの祭典を楽しむ人々で町は賑わった。

前々回（1997年）の「ドクメンタ」では、初の女性芸術監督であったカトリーヌ・ダヴィッドのもと男性中心主義からの脱却が旗印とされ、前回（2002年）では、初の有色人種の芸術監督、ナイジェリア出身のオクウィ・エンヴェゾーによりヨーロッパ中心主義からの解放が図られた。今回の「ドクメンタ12」では、そのような明確な方向性を見出すことは難しいが、その代りに、著名作家の招請や奇抜な作品による話題づくりに頼るのではなく、男女比や、アジア、アフリカ、中南米地域出身の作家への配慮も窺える、バランスの良さが特質とされる。また、現在活躍中の現代美術作家だけでなく、田中敦子ら20世紀の先駆的作家や葛飾北斎も含めた古今東西の多様な作家の作品も並置され、地域と時間の枠組みを超えたアートの在り方が提示された。

例年の主会場であるフリデリチアヌム美術館とその周辺に点在する複数の施設のほか、郊外の緑豊かなヴィルヘルムスハーエ公園に立つヴィルヘルムスハーエ城が会場とされたことも今回の特色であった。ヴィルヘルムスハーエ城の内部は、国立の古典絵画・彫刻の美術館となっており、バロック時代の名品等、伝統的な作品を蔵している。今回の「ドクメンタ」では、レンブラントの肖像画の横に写真を使った現代作品が並置されるなど、古典的な常設展の中に現代美術の作品を混在させる試みがなされ、来館者の目を引いていた。市街地を見下ろす丘に位置するヴィルヘルムスハーエ公園は、ヴィルヘルムスハーエ城のほかにも城館やヘラクレス像、「水の芸術」と呼ばれる流水によるスペクタクルが楽しみ

る水路や滝が設えられた庭も有し、市民の憩いの地であるとともに、カッセルの重要な観光ポイントでもある。この地での作品展示は、展示内容のみならず、カッセルの伝統的な名所へ鑑賞者を誘い、「ドクメンタ」と町の結びつきを一層強める効果を発する仕組みとしても注目されていた。

2. 新潟県における新たな試みー「水と土の芸術祭2009」ー

上記のように、地域との結びつきを重視した現代アートによる試みも、歴史を綴り、広がりや深みを増してきた現状がある。その歩みを踏まえ、第2章では、新潟県において実施された最新の事例を取り上げ、そこに見られる地域と現代アートの関係に注目する。

新潟県における地域と関わる芸術活動といえば、2000年から3年に1度、越後妻有地域で開催されている「大地の芸術祭・越後妻有アートトリエンナーレ」が知られている。これは、現代アートによる地域活性化の代表的事例であり、回を重ねるごとに地域とのつながりを深めつつ多彩な取り組みが展開されている。今では、3年毎の夏に行なわれるトリエンナーレのほか、毎年、秋や冬のプロジェクトも実施され、地域内外での存在感や影響力を強めている感がある。

2009年にも、7月26日から9月13日までを会期として4回目のトリエンナーレが開かれ、約37万人の来場者があった。今回は、26の国と地域から約150組の作家が参加し、約350点（前回までに設置された恒久展示作品160点を含む）の作品が、妻有地域全体を舞台として展覧された。作品の制作、展示のみならず、田島征三の「絵本と木の実の美術館」など、廃校を美術館や地域づくりの拠点として再生・活用する試みや、集落の長期的な地域計画にアートの力を活用しようという「芸術村」の始動、住民と来訪者を「食」でつなげるプロジェクト「むしろ旗・おにぎりプロジェクト」など、連動した多様な活動も実施された。4回目を迎え、地域との関係性の深化や国内外の多様なファクターとの連携の拡大・強化が窺える内容であり、また、より長期的視野に立ち、「継続性」を意識した取り組みが多いことが印象的であった。10年を越えた「大地の芸術祭」の一連の活動が、地域にもたらしたものについては、稿を改めて考えてみたい。

新潟県における新たな試みとして、ここで注目する「水と土の芸術祭」は、先述した「大地の芸術祭」で創設以来一貫して中心的役割を担ってきた北川フラム（新潟市美術企画監）⁷⁾がディレクターを務めて、新潟県において初めて開催されたものである。篠田昭・新潟市長を実行委員長とする「水と土の芸術祭実行委員会」の主催で、会期は2009年7月18日から12月27日、会場は妻有の場合と同様、726平方キロメートルに及ぶ新潟市全域であり、13の国と地域から参加した61組の作家による多種多様な71作品が展覧された。同じ新潟県内で、同じ人物がディレクターということで、「大地の芸術祭」と比較して新味のあるものとなるのか、危惧する声もあったが、妻有地域とはまったく異なる新潟市の地域特性を活かした、興味深い取り組みとなっていた。来場者数は、当初の目標の35万人を大幅に上回る約53万人であった。

信濃川と阿賀野川が日本海に注ぎ込む地に位置する新潟市は、川と海とのせめぎ合いの中で形作られてきたまちである。両河川がもたらす大量の水と土と、対馬海流と海からの季節風によって形成された砂丘が、この地の風土を作り上げてきた。そこに暮らす人々は、殊に水との過酷な戦いを強いられながらその営みを続けてきた。新潟市は、今も市域の4

分の1は海拔0メートル地帯という低地の多いまちであり、市内にはラムサール条約に登録されている佐潟をはじめとする潟や潟の跡地がいくつも存在している。20世紀初頭から機械排水が導入されて土地の改良が進み、人々は徐々に水を制圧して今日の新潟のまちを作り上げてきたが、腰や胸元まで泥水に浸かりながらの田植えや、同様に腰まで水に浸かっていたの稲刈りなど、過酷な農作業を強いられてきた地域の記憶は、そう遠いものではない。このような新潟の地域特性である「水と土」を名称とした今回の芸術祭は、先人たちの労苦に思いを馳せるとともに、芸術表現を通して新潟らしさを見つめ直し、まちのアイデンティティを確認する好機となっていた。

潟や潟の跡地、川辺や海辺、旧家の屋敷や廃校となった小学校の体育館など、市内各所において、サイト・スペシフィックな作品が制作・設置された。例えば、かつては東洋一と言われた旧・栗ノ木排水機場では、約700枚の自動車のフロントガラスを並べて水面を再現した、マリア・ヴィルツカラの《INTERVALS》が制作された。また、旧亀田浄水場では、「役割を終えて眠っていた浄水場を再起動し、水を蓄える場所としてではなく、水を逆流させて、約10メートル上から滝のようにあふれさせた」遠藤利克の《Trieb-氾濫》が、訪れる人々の目を驚かせた。《Trieb-氾濫》は、水の恩恵を受ける一方、「水と闘い、水の恐怖に向き合いながら日々を過ごし、また水をめぐり争ってきた新潟の人たちの、愛憎交錯する水への感情、情念を沸き上がらせる」ものという⁸⁾。浄水場の水槽から勢いよく水があふれ、流れ落ちる光景は、日常においては異常事態であり、特に、往時の浄水場を知る人々にとっては、恐怖に近いインパクトを与える作品として注目されていた。同じく旧亀田浄水場では、日比野克彦のプロジェクト《明後日朝顔 NIIGATA 2009》も展開されていた。これは日比野が2003年の「大地の芸術祭」に参加した際、筋平集落で開始した《明後日新聞社》と銘打ったアートプロジェクトの一環であり、筋平の朝顔のDNAを受け継ぐ種をまき、花を咲かせるという試みである。朝顔は、巨大な円形のタンクの外壁に張られた、古着で編んだロープを頼りに成長していくが、その材料となる古着の収集とロープの作製には、多くの市民が参加した。旧木津小学校体育館で展示が行われた、酒百宏一による《Niigata 水の記憶プロジェクト》も、市民参加型の作品であった。民具や農具、石碑など、水と土の記憶をとどめる様々な物を、フロッターージュという技法で紙に写し取る市民参加ワークショップを1年前から開催し、集まった約4千枚の作品が一堂に会したものである。膨大な数の作品が、体育館のスペースいっぱいにはざ波のような形状で展示され、「市民の水の記憶を、広い水面として表現」⁹⁾していた。

新潟市美術館と新津美術館でも、ユニークな特別展示がなされた。新潟市美術館では、新潟県唯一の国宝である縄文時代の「火焰型土器」も展示された《信濃川火焰土器プロジェクト》、新潟市をはじめとする日本各地で、布と接着剤によってそのままのがし取った土壌を作品化した、チーム・モノリス（坂井基樹&平山良治+中井信）の《はがしたての地球-土壌モノリス》、磯辺行久の《土のオペリスク》、久住有生の《土の一瞬》など、土そのものを素材とした取り組みが目をつけた。一方、新津美術館では、展示室の床いっぱいに敷かれた新潟市の巨大な地図を使った2点の作品が異彩を放っていた。1点目は、磯辺行久の《水のラビリンス》と題された、地図の上にもその場所で採取した水を入れたペットボトルが配置されているという作品である。キャップの色が青、水色、オレンジ色と分けられており、そのうち、オレンジ色は温泉を示しているという。鑑賞者は地図の上を自

由に歩くことができるため、空から新潟市を見下ろしているような感覚が味わえる。特に地元住民にとっては、身近な地域を思いがけない視点から見つめ直す興味深い機会となっていた。もう1点は、山口啓介の《アノマリーー新潟絵地図 niigata map》である。これは、新潟の地形や風土から作者がイメージした形を拡大トレースし、彩色したものであるが、多くの市民との協働により、新潟市美術館、旧鳥屋野小学校体育館、新津美術館と場所を変えながら、約1カ月半かけて制作されたものである。新津美術館の担当学芸員の話によると、土地から生じる「気」のようなものが表現されているという。また、同じく新津美術館に展示された作品の1つ、小原典子の《ミズタマリーNIIGATA》も、市民参加の手法で「新潟らしさ」を表現したものであった¹⁰⁾。暗い展示室の中いっばいに、天井から吊るされた色とりどりの小さなオブジェがきらきらと輝いているインスタレーションである。様々な形状の小さなオブジェは、蓄光塗料を練り込んだ樹脂を素材としたものであり、市内の小学校2校で行なったワークショップで子どもたちが制作した「ニイガタのタカラ」である。「タカラ」の中で一番多いのは、新潟の名産「笹団子」であるようだ。

以上、実見した作品からいくつか例を挙げたが、「新潟らしさ」の抽出と、市民参加の手法について工夫し、効果を挙げているものが多いとの印象を受けた。先行する越後妻有地域における「大地の芸術祭」の経験を活かしつつ、「新潟市」という新たな舞台で、アートの力が生き活きと発揮されている状況が窺えた。「アートが呼び起こす、『水』の記憶、『土』の匂い」というフレーズが、この芸術祭のチラシや作品集の表紙などに記載されていたが、「契機」となり「結び手」となる現代アートの優れたはたらきが実感される取り組みであったといえる。

3. 「ミュンスター彫刻プロジェクト」の特質とその効果

(1) プロジェクト創設の経緯と第4回展の内容

本章では、現代アートによる地域に根差した芸術活動の先進事例として、30年以上の歴史をもつドイツ・ミュンスター市における「ミュンスター彫刻プロジェクト」を取り上げる。このプロジェクトは、創設以来、同一人物が中心となり、「公共空間におけるアートの在り方」を一貫したテーマとして、10年に1度という長期の開催スパンで実施されているものであり、数々の国際美術展の中でもユニークな存在として知られている。

ここでは特に、第4回展である「ミュンスター彫刻プロジェクト07」に注目しながら、その特質と効果について検証する。

「ミュンスター彫刻プロジェクト07」は、ドイツ北西部、ノルトライン・ヴェストファーレン州の北部に位置する人口約27万人の地方都市、ミュンスター市で、2007年6月17日から9月30日までを会期として開催されたものである。世界各地からの来訪者は、約55万人を数えた。このプロジェクトは、1977年から10年毎に実施されており、今回が4回目の開催であった。

ミュンスターは、中世以来、ハンザ同盟の一員として交易で栄え、30年戦争の終結に当たっては1648年にこの地でウェストファリア条約が結ばれるなどの陰影豊かな歴史を有し、伝統的に保守的なカトリックの町という性格を持つ町である。

この「彫刻プロジェクト」は、1970年代に、ヘンリー・ムーアらの作品寄贈をミュンスター市やミュンスター大学が拒絶したことから起こった「芸術と公共性」をめぐる論争を

きっかけとして、市民の芸術への理解を深めることを目的に、州立美術館が中心となって始められたものである。当初から、町の歴史や地理、文化を踏まえ、設置場所と作品の関係性を考慮した上で作品制作を行なうというスタイルがとられたものの、初回は多くの批判を受ける結果に終わったという。しかしその後、対話を重ねる地道な取り組みを続け、今では多くの市民に支持される国際美術展に成長した。1977年の初回から2007年の第4回まで、その開催にあたって中心的役割を果たしてきたのが、当初は州立美術館のキュレーターであり、その後ドイツ美術界の要職を歴任してきたカスパー・ケーニツヒである。第4回展では、彼のほか、ブリギッテ・フランツェン、カリーナ・プラスもキュレーターとして参画し、33人／組の作家たちが、市中心部及びアー湖畔の公園を主要な舞台として思い思いの作品を制作、発表した。

中心部で注目された作品には、マルコ・レハンカの《ミュンスターのための花》、アンドレアス・ジークマンの《トリクルダウン 私有化の時代の公共空間》、マイク・ケリーの《Petting Zoo》などがある。レハンカの作品は、人通りの多いメインストリートの一角に立てられた、サーフボードを花びらとした巨大な花である。その中心部にはモニターが設置されていて、町の住民の名をもつ人物たちが登場する映像作品が流されている。ジークマンの作品は、歴史的な建造物の前庭に、プラスチック製の牛などの動物オブジェの残骸を、巨大な球状にまとめた形で設置したものである。これらの動物オブジェは、近年、ドイツ各地の州や市で盛んに設置されているものという。駅近くの、ビルに囲まれた空き地に設置されたケリーの作品は、小屋を設けて牛やポニー、ロバ、羊、山羊やニワトリを飼育し、来訪者と動物たちが触れ合えるという、一見、タイトル通りのものである。しかし、乾し草が敷き詰められた小屋の中には塩でできた女性像が立っており、時折動物たちが近づいてはなめているのが奇妙である。実は、この女性は、神に滅ぼされるソドムの町から逃れたものの、天使の言いつけを守れずに振り返ってしまい、塩の柱となったロトの妻であるという。小屋の天井付近には、3カ所にスクリーンが取り付けられ、死海やオーストラリアなどにある、塩柱となったロトの妻の姿を思わせる形状の岩塊が映し出されていた。

アー湖畔に歩を進めると、建物が立て込む街中とは全く異質の、緑豊かなのびやかな空間が広がる。その中に、広大な麦畑をサイトとしたバヴェウ・アルトハメル《路》、地中から教会の尖塔が発掘されたという格好の、ギョーム・ベイルの《考古学現場》、こんもり繁った木々を分厚い生垣のように長方形に造形し、その中ほどにアー湖がのぞき見える隙間を設けた、ローズマリー・トロッケルの「植物彫刻」《Less Savage than Others》、湖にかかる橋の両端の橋桁に仕掛けを施し、橋の下で女性の歌声が響きあう、スーザン・フィリップスのサウンド・インスタレーション《失われた反響》、市街地に一番近いアー湖の岸辺に設置され、汲み上げた水を浄化して湖に戻す働きをしている、トゥエ・グリーンフォルトの噴水車《Diffuse Entries》などの作品が点在していた。

後述するが、第3回展までに出展されてその後も恒久展示されている作品も併せて目にするができるため、プロジェクトの歴史にも触れながら、まちの様々な場所に歩を進めていくことになる。まち全体に漂う穏やかながらも祝祭的な雰囲気の中で、多くの人々が、作品とともにまちそのものの多様な魅力に出会うひと時を楽しんでいた。

(2) その特質と効果

「ミュンスター彫刻プロジェクト」の特質としてまず挙げられることは、町の歴史や文化、自然等を踏まえ、それぞれの「場」の個性を作品の重要な要素として取り込んだ上での創作が重視されていること、つまり、そこでしか見られない「サイト・スペシフィック」な作品が制作され、設置されている、という点である。これは、プロジェクト創設の経緯からして、このプロジェクトの根幹をなす仕組みであるが、実際に現地では作品を訪ね歩いてみると、町の存在そのものと深く関わるプロジェクトの在り方が実感される。それぞれの「場」が持つ文脈に配慮したサイト・スペシフィックな作品を制作・設置することや、町を舞台にそのような作品によってアートプロジェクトを展開することは、昨今、世界的なアートシーンの中でよく見られる動きであるが、ミュンスターでの取り組みは、その先駆をなすものである。同時に、先駆者としての存在感のみならず、現代美術の最先端のプロジェクトとして、「ミュンスターならではの」独自性や力強さを発信し続けているところが注目される。

以下ここからは、より具体的に、今回の実地調査を通して看取された「ミュンスター彫刻プロジェクト」の特質を挙げ、そこから生じるこのプロジェクトの魅力と効果を考察する。

町の規模（作品展示の範囲）が程よく、鑑賞者は、徒歩や自転車により、自分のペースで、落ち着いた心持ちで作品を見て回ることができる。

作品のほとんどが屋外展示であり、町の中に点在しているため、開放的な雰囲気の中、時には住民に道を尋ねながら町の様々な場所を回ることになり、町に対する親しみが増す。

主会場の2つが、隣接はしているものの、市街地とアー湖畔という大きく性格の異なる地域であるため、作品の展示空間としてのそれぞれの個性が引き立ち、プロジェクト全体の印象をメリハリのあるものにしていく。

第3回展までの旧作のうち39点が恒久展示されていて、プロジェクトの歴史を感じさせる。例えば、市街地中心部の広場には、大きな赤いさくらんぼを2つ頂いた、脚部分が引き延ばされて柱のような格好になった丈高いコンポートが、まるで何かの歴史的モニュメントのように立ち、湖岸の緑地では、複数の巨大な白い球体が、どこからか転がってきて今その場に停止したばかりのように佇んでいる（前者は、1987年の第2回展に出品されたトーマス・シュッテの《Kirschensäule（さくらんぼの柱）》、後者は、1977年の第1回展に出品されたクレス・オルデンバーグの《Giant Pool Balls》）。どちらもすっかり町の風景となって人々に親しまれており、このプロジェクトが町に根付いている様子が実感された。また、2007年の新作であるが、ドミニク・ゴンザレス＝フェルステルの《ミュンスター物語》は、過去3回のプロジェクトでの代表的な作品の数々をミニチュアとして再現したものであり、プロジェクトの歩みを振り返るユニークな試みとして注目されていた。市街地とアー湖の間に位置する公園内の広々とした緑地に、市民やファンにとってはなじみ深い造形がかわいらしいサイズとなって点在しており、作品に腰掛けてのんびりとくつろぐ人々や作品の間を走り回って遊ぶ子供たちの姿が見られた。

プロジェクト実施のスパンが10年であるのは、スピードや効率が求められがちな現代社会においては長すぎるようにも感じられるが、実は、ミュンスターという町のあり方にはマッチした仕組みであるといえる。ミュンスターは、ゆったりとした時の流れを実感させ

る町である。戦後の復興を経て、中世以来の面影を残す町並みには、往時からの連綿たる歴史が感じられ、また、細長いアー湖に沿った遊歩道では、日常の忙しさを忘れての散策が楽しめる。また、ミュンスターはドイツの自転車の町としても知られる。車道と歩道の間には自転車専用レーンが設けられ、市内のどこでも数多くの自転車を見かける。人力をエネルギーとし、車よりもずっと小回りが利き、自然の息吹や町のにぎわいを直に感じつつ、ゆっくりと移動できる自転車は、環境にやさしく、「人間性」豊かな乗り物である。自転車の町・ミュンスターには、昨今注目される「スローライフ」のコンセプトに通ずる、じっくりとした時の歩みがある。彫刻プロジェクトがもたらす10年ごとのサイクルも、このようなミュンスターでの時の流れと調和するものといえよう。

10年というスパンでこれまで4度実施されてきた彫刻プロジェクトは、ミュンスターという町に何を与えてきたのだろうか。回を重ねるごとに増える作品と、それらが作り出した新しい風景が、まず挙げられる。それに加えて、プロジェクトを目当てに国の内外からやって来る多くの来訪者たちや、ミュンスターの知名度アップも指摘されるであろう。さらに、町のあちらこちらに設置された作品とそれによって生み出された新しい風景を介して、自分たちの町に向けられる市民のまなざしが、数量的、質的に変化したことが、このプロジェクトがもたらした非常に大きな成果であると考えられる。

ミュンスターは、2004年に、UNEP（国連環境計画）とIFPRA（国際公園レクリエーション管理行政連合）によって承認される国際的表彰制度 LivCom（The International Awards for Liveable Communities）において、人口20万人から75万人規模の部で、450を超える候補の中から世界でもっとも住みやすい市に選ばれ、Gold LivCom Award を受賞した。この賞の受賞は、ドイツでは初めてのものであった。「よりよい景観づくり」、「歴史的遺産の保全」、「環境に配慮した生活」、「市民の参画・協働」、「総合的・持続的な将来計画」の5項目で高い評価を受けたという¹¹⁾。

このような評価に至るミュンスターの歩みの中で、彫刻プロジェクトはどのような役割を果たしてきたのだろうか。多くの意見の対立や様々な試行錯誤を繰り返し、30年という時をかけて今に至ったこのプロジェクトは、住民の町に対する関心を深め、ミュンスターの多様な特質と有機的に関連しながら、じっくりと、内側から、町を元気づけその魅力を増すことに力を発揮してきたことは確かであろう。

むすび

今回の調査・研究を通して、あらためて浮き彫りにされたものは、「契機としての」あるいは「結び手としての」現代アートの力である。本来、芸術には、日常のまどろみから人々を覚醒させ、多くのことを考えさせ、人と人、人と町、人と自然を結びつける優れた力が備わっているが、ここまでの検証を振り返ってみる時、そのような力がとりわけ現代アートにおいて生き活きと発揮されている感を受ける。

昨今、各地において現代アートによる活動が盛んになっている背景には、現代アートそのものの質的な変化や受け手側の「慣れ」や「成熟」とともに、より積極的に、現代アートならではの魅力やはたらきを認め、その力を広く社会の中で活かしていこうとする動きが強まっている状況がある。

現代アートの手法では、テーマにおいても素材や技法においても非常に自由な発想を活

かすことができるため、人をハッとさせるような「意外性」のある作品が生み出される。それらは、地域を新たな視点から見つめ直す契機を人々に与えることができ、それまでは想像もできなかったような新鮮な魅力を地域に付与する存在ともなり得る。

また、同様の理由から、多くの人々が参画し協働する可能性が大きいということも、現代アートの強みである。伝統的な芸術作品の制作では、一人の作家が長年の修練を経て習得した技法を駆使して、一つの小宇宙といえる作品を作り上げていくという過程が普通であるが、現代アートの世界では、そのような伝統的な芸術の在り方からは、まず考えられないような、人々と作品との様々な関わりが実現している。

現代アートが持つ「自由度」は、従来、「難解である」「公共性の観点からはリスクが大きい」といった批判を受けがちなものであった。今日においても、「難解さ」や「リスク」が払拭されたわけではないが、そのような性格も含め、現代アートを「面白いもの」として肯定的にとらえて、楽しみ、活かそうとする人々の存在は、確実に増えている。そのような流れの中で、今後も「現代アートならではの力」に注目し、芸術表現と地域社会の関係性に関する考察を深めていきたい。

注

- 1) 「ベネッセアートサイト直島」は、直島を舞台にベネッセホールディングスと直島福武美術館財団が展開している多様なアート活動を指して、2004年から使われている総称である。
- 2) 秋元雄史・徳田佳世企画『NAOSHIMA STANDARD²』財団法人直島福武美術館財団、2007年、138頁。
- 3) 神戸ビエンナーレ組織委員会「神戸ビエンナーレ2007開催概要」
(<http://www.city.kobe.lg.jp/information/committe/innovation/proposal/img/03-biennale.pdf>)
- 4) 主催者（神戸ビエンナーレ組織委員会・神戸市）発行のパンフレット「港で出合う芸術祭 神戸ビエンナーレ2009」より。
- 5) 神戸ビエンナーレ組織委員会『『アート イン コンテナ』国際展』
(<http://www.kobe-biennale.jp/compe/container/index.html>)
- 6) 神戸ビエンナーレ組織委員会「グリーンアート展」
(<http://www.kobe-biennale.jp/compe/green/index.html>)
- 7) 第4回展にあたる「大地の芸術祭・越後妻有アートトリエンナーレ2009」では、総合プロデューサーを福武總一郎、総合ディレクターを北川フラムが務めた。
- 8) ≪Trieb-氾濫≫についての解説は、北川フラム・水と土の芸術祭実行委員会監修『水と土の芸術祭 2009』水と土の芸術祭実行委員会事務局、2009年、61頁。
- 9) 同上書、63頁。
- 10) 新津美術館の他にも、市内2カ所（祖父興野米倉庫、旧JA新潟市濁川支店）で、小原典子の同様の手法による作品が展覧された。
- 11) City of Münster: LivCom Award
(<http://www.muenster.de/stadt/livcom/index218.htm>)

参考文献

秋元雄史・徳田佳世企画『NAOSHIMA STANDARD²』財団法人直島福武美術館財団、2007年。
大森正夫監修・神戸ビエンナーレ組織委員会事務局編集『神戸ビエンナーレ2007』神戸ビエンナーレ

レ組織委員会、2008年。

北川フラム・大地の芸術祭実行委員会監修『アートをめぐる旅ガイドー大地の芸術祭・越後妻有
アートトリエンナーレ2009 公式ガイドブッカー』美術出版社、2009年。

北川フラム・水と土の芸術祭実行委員会監修『水と土の芸術祭 2009』水と土の芸術祭実行委員
会事務局、2009年。

美術手帖編集部『美術手帖』美術出版社、2007年9月号。

美術手帖編集部『美術手帖』美術出版社、2009年5月号。

Brigitte Franzen, Kasper König and Carina Plath, *Sculpture Projects Muenster 07*, Köln: Verlag der
Buchhandlung Walther König, 2007.

Christa Farwick and Adam Riese, *The Münster Book*, Münster: Daedalus Verlag, 2007.

Documenta12, *Documenta Kassel 16/06–23/09 2007 Catalogue*, Köln: Taschen GmbH, 2007.

Michael Imhof, *Kassel : Guide de la Ville*, Petersberg: Michael Imhof Verlag, 1997.

Skulptur Projekte Münster 07, LWL-Landesmuseum für Kunst und Kulturgeschichte, Münster,
Sculpture Projects Muenster 07, Köln: Verlag der Buchhandlung Walther König, 2007.

付記：本稿は、2009年度島根県立大学学術教育研究特別助成金による調査・研究成果に基
づくものである（研究テーマ：地域活性化に資する現代アートのカー地域に根ざし
たアートプロジェクトの展開に注目して）。

キーワード：現代アート アートプロジェクト 地域創生

(HATTA Noriko)